

1. 電話の実験

良いか悪いか、ではなく、一般的な傾向として、若者は教えられたものを信じ込みやすい傾向があります。教員は注意しなければなりません！シェルドレイクの実験例は、統計学のわかりやすい適用例なので話しました。

人間に果たしてそのような能力があるのかどうか。それは、別途確かめるべきです。私たちがときどき、「テレパシーがあるのか」と思いがちなのは、そういう時だけ覚えている、という可能性がありますね。（この話は授業で何年も話しています。「自分たちでやってみよう」と書く学生は多いですが、実際には実現していません。）

最初の方の電話の実験で、自分も電話の相手が誰かというのを当てることがあったから興味があった。でも、偶然だろうと心の中で片付けてしまっていたため実験しようとか、調べた人はいるのではなど考えることは全くなかったから、45%もの確率で当てれると知って衝撃を受けた。また、自らの思い込みにやられてしまったようだ。

テレパシーはないと決めつけずに、疑問を持ち実験してみるのとはとても楽しそうだと感じた。

印象に残っていて覚えているのかもしれないが、わからない問題に限って指名されたり、発表したいときに限って指名されなかったりすることが多々あるのでテレパシー的な力は信じてはいないが納得するものがあった。

いない人を当ててしまう先生も、電話の実験のように何らかの力が働いているかもしれないと思った。

ちょうど、心理学測定法という授業で来週、統計検定を学ぶところでした。（中略）心理学と仮説検証の考え方がつながったのがとても面白いなと思ったのに加えて、勉強していてよかったなと感じました。

エスパーなどの超常現象は科学的にありえないとよく耳にし、そういうものだと思っていました。しかし実験して調べてみると偶然の確率をうわまわっていたことを知り、専門の人が言っているからと決めつけて終わりにしてしまう所が自分にはまだ足りていない考え方の部分だなと痛感しました。

占いも一種の超能力ではないのかなと考えていますが信じておらず、それこそ思い込みなのでは？と考えています。一度自身で実験したのですが、“今日1日の運勢(星座別、血液型別 etc...)”というのが朝のテレビ番組であります。これを1日が始まる時と1日の終わるときでそれぞれ別の日に見てみました。その結果、1日の終わりに自分の1日を振り返りながら見ると全く合っていませんでした。1日の始まりに見たときは、無意識に“今日の自分は運勢が悪い”というような思い込みに囚われながら1日を過ごしてしまう＝占いが当たっていると勘違いしてしまう、と考えることができました。僕はこれを月曜から金曜までの5日間試した結果こう思うようになりましたが、一番の問題点は朝見た占いの結果を昼過ぎまで覚えていられるかどうか、でした…。

電話の実験について、私もたまにこのような事が起こるので興味深い実験でした。地道にこの実験をして、結果に導くまでの信念がすごいなと感じました。

今日の授業直前に専攻を何にしようか悩んでいて、社会学はどんな学問だろうと考えていたところでした。そして授業で先生に社会学とはどんな学問か聞かれました。もしやこれもレパシーでしょうか？！（笑）

2. 苦痛の研究

アリエリーの苦痛の研究は、興味深い研究です。そもそも、私たちは日常的に苦痛を感じているわけではないので、少ない体験の中から経験則を導いたり、他の人の話を聞いて、情報を集めて判断します。医療行為をする人と、患者と、双方がそのような認識を持って、お互いにコミュニケーションを深める必要があります。

なお、アリエリーの苦痛の研究は、被験者は、当然、アリエリーだけではありません。

痛みは時間と共に蓄積されなくても、一思いにやってほしいし包帯を変える側も痛がっている姿をずっと見ているのは辛いと思う。苦痛の時間が長いのは、蓄積されなくても嫌な気がする。

アリエリーが話していたことについて私も似たような体験（ガーゼをとってもらうなど）があった。私はアトピー性皮膚炎で塗り薬を定期的に塗るのだが子供の時は背中に手が届かず親に塗ってもらっていた。たまにひっかき傷ができるのだがその時は薬を押し込むように塗られすごく痛かった。どうやら私の親は傷ができたからしっかり薬を塗りこまないといけないというように直感的に考え、押し込むように薬を塗ったのだ。このようなこともあって今回のアリエリーの話には共感し、関連付けて理解できた。

アリエリーさんの実験がとても印象深いです。身体の70%をやけどで覆ったアリエリーさんの包帯を取るのに、私は後者の時間をかけていたみを和らげる方法の方がいいと思いましたが、その場の学生や看護師たちの、素早く終え苦痛を短時間耐え抜く、と言ったことが多数派で、まずこの時点で驚きでした。もし自身が大火傷を負い全身に包帯を巻く機会があったとして、弱っている皮膚に巻きついた包帯を遠慮なく剥がされたら叫んでしまう自信があります。みんなもそうだと勝手に思っていました。多数派の意見を支持する人はもしかしたらとてつもなく痛みに強いとか、一瞬で終わらせて欲しいとか、効率を重視した考えがあるのかもしれない。そしてその医療現場の現状に疑問をもち実験をして身をもって苦痛のモチベーションについて一つの答えを導いた件が、感心した点です。みんながこうだと考えている固定観念に異議を申し立てることは勇気が伴う上にその論拠を集めることも簡単なことではないので、素直にすごいなあ…と感じました。

3. 反証可能性

まず、反証可能性の指摘については、科学の世界で深刻に受け止めるべき点であると考えます。

しかし、反証可能でないので何とも言えない、というわけではありません。この方が良い可能性がある、ということ認識して行動する、という態度が必要ではないでしょうか。

「GOTOトラベルによって感染が拡大したエビデンス（証拠）は無い」という表現を政治家がします。そもそも反証可能でないで証拠を示せません。しかし、「だから事業を継続する」べきかどうか、は別の判断です。

カール・ポパーの考えのように科学は反証可能でないといけなと思っていましたが、その後の反証ができない例を見てからそんなことないのかなと思ってしまった。

一見、CO2が人間が発展したから増え、地球温暖化が進行したという意見は科学的で正しそうに見えるが、ポパーの主義をとるとそうではなくなるのは面白いと思った。

反証可能でなければ科学と言えない。否定する手段がなければ科学と言えないというのは確かにそうであるなと思った。そういう意味では、パラレルワールドのようなオカルトというものは科学的でないという風に私は理解しました。

科学は何にでも使えると思ったが、「反証可能でなければ科学と言えない」というのを聞いて、またゼロから科学とはを考えてみたが今は頭が少し混乱してよくわからない。こうゆうのはできて、こうゆうのはできないとハッキリ言える自信はまだないが考えていきたいと思う。

科学のABCは、科学の分野だけでなく、日常生活や社会学など幅広い分野で活用できることを今回の授業で感じる事が出来ました。しかし、すべてのことに活用できるわけではないということも知ることが出来ました。

4. 科学のABCと人生

反証可能でない例の典型は人生です。

そのことは、既に、皆さんが色々体験していますね！

しかし、だから、何も考えなくてよい、何も判断しなくてよい、というわけでもありません。では、どうすればいいのか？

反証可能かというお話を聞いたときに、ピアノのコンクールに出場していた時のことを思い出しました。私は13年間ピアノを習っていたのですが、その13年の間で数えきれないほどのコンクールや発表会に出場してきました。しかし、結果や出来栄は毎回違うのです。いくら練習しても力を発揮できないときにはコンクールで入賞することすらできないけれど、それとは逆に全国大会に進出することができたこともありました。(中略) 舞台は生物(なまもの)と言うけれど、どの本番もたった一回の出来事でしかなかったのだ、と授業を通して改めて感じました。

科学のABCにおいて、反証可能であるということが条件の一つとして挙げられると学び、人間個人の人生選択などではほとんど用いることはできないなと感じた。自分の過去の選択に対して、「あのとき違う選択をしていればよかった」と後悔したとしても、実際どちらの選択が正しいという正解はないのだろうと思う。反証が不可能であり、だからこそ生命の一生は尊いのではないかと感じた。

私はふとした時に、私たち人間は何のために生きているんだろうと考えたり、歩いているときに、いつも歩いている道ではなく別の道を通ると今後の運命が大きく変化するのだろうかと考えてしまいます。自分で科学のABCを考えるときに、日頃の疑問から考えてみるのが少し難しかったのは、反証可能ではなかったことが原因だったのかなと感じました。

5. 正しい道か

話の枠組みは違いましたが、ヴェーバーの述べていることと、アリエリーが述べていることが共通していることは面白いですね。社会科学のような学問も、なんとなくぼんやりした考えで結論付けてはいけないし、社会全般で何となくこうだ、と言っていることも、確かめてみるべきです。

ビデオの中に出てきた「直感が示す道は本当に正しいか考えてみるのが重要である」この言葉が普段疑いもせずに信じていることが実は間違っているのかもしれない。

動画内のアリエリー教授の「誰もが信念として深く信じていることが実は間違っている場合が多いのではないか」この部分に非常に共感しました、人間理解の別の授業で民族についての授業を受けた際にも同じようなことを言っていました。

ヴェーバーの「大雑把な印象だけで判断するのは止めて、もっと丁寧に論証すべき」というのは私たちに必要とされている考え方なのではないかと感じました。物事を考える時に色々な角度から見るというのはもちろん、人と関わる時も第一印象や周りの噂（偏見）で相手を判断しないといったことに繋がってくるのかなと思いました。

原因と結果を結び付け、「これはこういうものだから」と決めつけないことは、簡単なことのように見えるが、実際に自分がやるとついつい決めつけてしまい、難しそうだと感じた。

アリエリーの考え方と実験はすごく面白かった。私も看護師達と同様に安牌で結果が想像できる選択肢を無意識に選んでいるように感じた。

人間が積み上げてきたことを自分から否定することは難しいことだと考えさせられた。

アリエリーが話していた、直感が正しいとは限らないのに実行しないというところに人間の固定概念の強さを感じた。

常識と思われていることが実は間違っていることもある。この言葉は人生で何度も聞かされてきたけれど、やっぱりだれも疑わない常識を考え直すことは非常に難しい事だと思います。でも、この事を意識するのとしないのでは全然違うのかなと感じました。

ヴェーバーの言葉の「?がどうだとかだけで結論してはいけない」に科学では何回も試すべきなのだと感じた。

行動経済学についてのビデオを見て、誰しもあるものに関しては自分が正しいと思うことがあり、それを変えたくないという人は多いとより感じました。自分もそういうことがあるかもしれないので、謙虚に見直すべきだと考えました。

「民主主義」という、一つの重要なキーワードが登場しましたね。

センメルヴェイスは、直接的に暴力を振るわれてしまったわけです。しかし、民主主義の制度の下では、私たちは気づかず、判断しないまましていると、どのようなことになるでしょうか。誰かに間接的に暴力をふるっていることがあるのではないかと、ということは、常に考えておく必要がありそうです。

私は個人的に、赤木さんを自殺に追いやった責任も感じています。死刑囚が死刑になったときに、また私たちが殺してしまった、と責任を感じています。

安全と道の分かれ道の話は実に日常的かつ革新的だ。要するに我々が選択をする際、常にこれまでと同じ道、同じ歩き方を選びがちということで、未知の方法、道（ダジャレではない）を選ぶことを無意識下で半ば悪と決め、回避しているということである。これを行わせているのは正しいという概念、常識という足枷であり、人類にとって自然災害に並ぶ真の恐怖、同調圧力である。みんながしていることが正しく、その枠を超えて失敗すれば責任も恥も段違いだ。人をそれを恐れる。道に対する失敗よりも、その先の自身の評価、周りの目を気にして行動を制限してしまう。映像の中の発言者のような、異を唱える者は迷惑で恐ろしいのだ。だがその先のスピーチでも分かる通り、そうやって誰もが納得し、妥協し、麻痺してしまった常識、法則に再び客観的な視点で対峙できる存在。こういう者が後に本当の大将になる。異端を奇異と捉えるか、革新と捉えるか。また自分自身が一步固定観念から抜け出せるか。一人一人がこのことを意識し、実践したとき初めて、本物の民主主義は成るのではないだろうか。

6. その他

宿題を既に見たのですね！

この実験に参加した人は、この実験に参加した過去を消し去ることができません！

スタンフォード監獄実験は、状況が人間の行動に大きな影響をもたらすということをとて理解できた実験でしたが、とても残酷な実験だと感じました。（中略）現実社会でも、親から虐待を受けたり、あまり愛情を感じずに育った子供たちが、学校でいじめをしたり、不良になってしまうなど、（私の勝手な考えですが）育った家の環境で性格が形成されるのも、状況が与えるの影響ではないかと思いました。

キリスト教は、仏教、イスラム教と共に、世界三大宗教と呼ばれます。仏教が日本の歴史と関係が深いように、キリスト教は、欧米の歴史と関係が深いです。そして、歴史的な背景は、国際的な相互理解に不可欠です。せっかく、キリスト教関係の大学なので、キリスト教に興味を持って学んでください！

キリスト教入門からキリスト教を理解するのに手こずっていたので、本日の授業のキリスト教の話がでできたところは、少し難しく感じてしまいました。